

日本語日常会話における非並列用法の「とか」による引用の分析

著者	臼田 泰如
雑誌名	言語資源活用ワークショップ発表論文集
巻	6
ページ	240-248
発行年	2021
URL	http://doi.org/10.15084/00003498

日本語日常会話における非並列用法の「とか」による引用の分析

白田 泰如 (国立国語研究所 音声言語研究領域)*

Quotation with Non-Parallel “toka” in Everyday Japanese Conversation

Yasuyuki USUDA (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

本研究では、日本語による自然会話において、「とか」が物語の要素としての発話引用を構造的に配置する方法として用いられていることを論じる。「とか」について、「銅メダルとかとっちゃって」のような並列ではない用法は比較的近年において用いられ始めたとき、研究はまだ多くない。とりわけ実際になされた会話に基づき、会話の中でのふるまいを経験的に分析した研究は管見の限りなされていない。本研究ではそのため、国立国語研究所において構築中の『日本語日常会話コーパス (CEJC)』モニター版をデータとし、会話分析の手法を用いて、具体的にどのように物語の中で「とか」が用いられるかを分析する。なお、ここでの物語とは、あるひとまとまりの出来事が時系列的に語られている発話連鎖を指す。また、本研究では発話者自身や第三者の可能な発話を引用するための標識として「とか」を用いている例に絞って分析する。

1. はじめに

日本語の会話ではしばしば、「とか」という複合助詞(砂川 1987)を用いて、第三者や自分自身の過去の発話、あるいは仮想的な発話を引用するふるまいが見られる。たとえばデータ 1 のようなものである。

データ 1 は、親しい友人数人で食事会の会話の一部である。A が会場のレストランに着くまでに電車で遭遇した出来事について語っている。断片の直前までの部分では、幼い子供を連れた男が子供を肩車したまま電車に乗ろうとして、子供を電車のドアの梁に強打したということが話されている。断片はその語りの続きである。>を付した行では「とか」を用いて、A が遭遇した出来事の登場人物である「お父さん」および「お母さん」の発話が引用されている。

「とか」は従来、「A とか B とか」のような形で類似のものを並列する表現を作るために用いられるものとして扱われてきた(寺村 1991, 森山 1995)。これに対し、並列的な構文を作らず、類似のものが他にもある(「一部例示」)ことを示すのでもない「卓立的提示」(天野 2001)という用法は、比較的近年において主に「若者」に用いられるとされる。こうした用法のうち、特に第三者や自分自身の発話を引用するマーカーとして用いる用法についてはあまり研究されておらず、とりわけ実際になされた会話に基づき、会話の中でのふるまいを経験的に分析した

* usuda@ninja.ac.jp

データ 1 [会話 ID: C001_001 284.727 秒-302.412 秒]

- 1 A <うわー>つ [て泣き始め [て:。(両手を肘前から顔の高さまで上げながら、「わ」の時点で手を開く))
- 2 D [あ:..... [::
- 3 E [そりゃそうだよね:
- 4 B ssshhhh[hh
- 5> A [でおか [あさんがうそで] しょう? とか [言っ h[て h hahahahh
- 6 B [お父さん]
- 7 D [hhhahahahahahahahaha
- 8 B [hahahahahaha
- 9 E た h[し h か h に h
- 10> A [何やってんの:とか言って [hhh
- 11 D [やり s[o う でも お父さ [ん
- 12 E [た:しかに
- 13 E [ひ [ど:い
- 14 B [お父 [さ:ん
- 15> A [ね hh[うわ:ごめんとか言って
- (0.2)
- 16 A うわー 男自分のことしか考 [えてな:いと思って:
- 17 E [そうだね: もう
- 18 D [(考え) てな:い
- 19 D ほんとそうだよ [ね。
- 20 A [うーん。
- (0.3)
- 21 D そうだよね。

研究は管見の限りなされていない。本研究の目的は、「とか」というマーカを用いた引用によって、会話の中で何が達成されているのかを、個別の会話を質的に検討することにより明らかにすることである。

2. 先行研究

「とか」は従来、類似のものを並列する構文を作る文法要素として扱われてきた(寺村 1991, 森山 1995)。これに対し、並列的に用いない用法にも近年は焦点が当たりつつあるといえる(天野 2001, 中俣 2008, 大和 2010, 劉 2011, 洞澤・奥村 2015, 住吉 2015, 山下 2017)。

このうち、1で言及した天野(2001)では、並列的用法以外で単独で使われる用法として、対人配慮的な「断定回避」の用法を従来のもので挙げて、これと対置して近年の用法として「卓立的提示」を挙げている。天野(2001)は2000年シドニーオリンピックにおける選手へのインタビューの中で見られた例として「銅メダルとか取っちゃって」というものを挙げ、「若者世代に拡張されている「とか」には、「ぼかした言い方・自身のない言い方」ではなく(104)」「評価の際立ったものが集合として想定され、その一部例示(105)」がなされる用法であると述べている。

また、中俣(2008)は並列の「とか」と、とりたて助詞の「も」との用法を比較している。「も」

はすでに話題に出ているものごとの集合から話題のものを取り出すのに対し、「とか」は新情報であっても用いられるとする。また、類例の集合のうちのひとつを取り出していることが容易に想定される場合だけでなく、類例が想定しにくいものについても用いられ、「なんか」と交換可能な場合があると述べている。加えて、「なんか」と異なり、「とか」にはとりたてられたものについての否定的評価のニュアンスはないとしているが、この点について住吉 (2015) は、「一般的に話し手にとって不利である事柄 (69)」が後続するという傾向があるとし、「話し手の予想や期待から外れる事柄」を導く「意外性の「とか」」として位置づけている。

一方、住吉 (2015) には引用マーカーとしての「とか」に言及があるが、「引用用法」として括り出し、「意外性」や「ぼかし」といった用法とは区別しており、また主たる議論の俎上に上がっていない。そのため、引用に用いられる「とか」がどれに該当し、どれには該当しない、あるいは別の意味や効果を持つのかといったことも述べられていない。本研究の4では、引用に用いられる場合に焦点を当て、実際の会話の中で用いられた例を分析し、これまで述べられてきた用法が会話の中で引用に用いられる場合にも当てはまるのか、異なる部分があるとしたらそれはどのような点か、について議論したい。

3. データと方法論

本研究で扱うデータは、国立国語研究所において構築が進められている『日本語日常会話コーパス (CEJC)』モニター公開版小磯ほか (2020) である。CEJC は日常生活における会話の多様性をできるだけ反映し、さまざまな研究に利用可能な形で提供するため、音声および映像と文字起こしテキストを利用可能な形で提供するほか、以下のような特徴を備えるよう設計されている。

- **大規模**：200 時間分の会話データ（完成時、モニター公開版は 50 時間）
- **代表性**：年齢・性別・属性・会話の種類 of 均衡性を考慮
- **検索性**：形態論情報（品詞、文中の位置、発話時間など）

上記の自然会話データについて、会話分析 (conversation analysis, Sacks et al. 1974, Schegloff 2007) の方法論にもとづく分析を行う。会話分析とは、「人が日常生活の中で従事する多種多様な実践的諸活動——会話、会議、診察、面接、ゲーム、授業、接客等々——を構成する出来事や人びとの振る舞いが、いかにしてその場で常識的に合理的な理解可能性を備えるものとして成立しているか、この秩序を産出するための社会成員の「方法」(Garfinkel 1967) を、発話をはじめとする相互行為中の振る舞いの観察を通じて明らかにする」方法論である (平本 2018)。我々はやりとりを行いながら日常のさまざまな活動を行なっている。そうした活動の中のやりとりに用いられることばや身振りなどのふるまいは、すべてがそうではないにせよ、その活動を構成するひとつひとつの行為や活動全体を成り立たせるための参加者の指し手になっているものを含んでいる。会話分析が採用する分析方針は、どのようにしてそうしたふるまいが行為を構成する指し手になっているのかを明らかにすることである。

4. 分析

1 のデータ 1 をもう一度見て欲しい。この会話断片では A が遭遇した出来事を、時系列的に順を追って話している。このような会話の状態を物語 (storytelling)(Jefferson 1978, Mandelbaum 2012) と呼ぶ。この断片における物語において A は、子供の父親らしい人物が子供を電車のドアの上部に打ちつけるという、ある種の特異な事態を提示したのに続いて、その事態の当事者の発話を引用して提示している。「とか」による引用は 5 行目, 10 行目, 15 行目に出現しており、それぞれ出来事の登場人物(「お母さん」および「お父さん」)の発話が「とか」によって引用されている。一方、その出来事を目撃した語り手自身の所感が述べられている 16 行目においては、引用マークは「と」が用いられている。

「とか」でマークされる 5 行目, 10 行目, 15 行目の引用は語られている出来事の当事者の発話であり、出来事の主たる構成要素である。この出来事自体が A の期待や予想に反したもので、それゆえ語られる価値をもっていると考え、出来事における当事者のふるまいは、先行研究(中俣 2008, 住吉 2015)の指摘通り、予想に反したことがらとして提示されているといえる。そうした要素が「とか」で提示されているのに対し、16 行目は出来事に対する語り手の所感であり、すでに提示された出来事から当然の帰結として語り手のうちに生じたものとして提示されている。それゆえこの発話は出来事の当事者のふるまいほどの卓立性をもたず、「と」というマークで提示されていると考えられる。

これらのことを整理すると、物語における新奇なことがらを構成する発話引用には「とか」が用いられうると考えられる。もうひとつデータを見てみたい。データ 2 は親しい友人同士のふたりがレストランで食事をしながら会話をしているところの一部である。この断片の時点での話題は、A の大学生になる息子が最近ガールフレンドと関係を解消したというものである。この断片より前の部分でも、息子が A に、ガールフレンドとの関係に悩み、ついに関係を解消するに至ったと報告したことが語られている。また A はかねてより B に、A の息子のガールフレンドは A の息子に対してあまり協調的でないという話をしてきた。

データ 2 では、「とか」による引用と「って」による引用がみられる。2 行目は 1 行目に返答せず、改めて息子がガールフレンドと関係を解消したことをどのように報告したかの説明を開始している発話である。息子が A に報告したやりとりの説明は 7 行目まで続いている。他方、7 行目までの説明より後の発話の引用では、9 行目, 11 行目, 12 行目, 13 行目, 16 行目, 17 行目の発話で「とか」が用いられている。

データ 2 では、出来事を構成する発話と出来事に対する語り手自身の見解という対比と引用マークの区別は一致せず、むしろ先行する時点ですでに語った内容の再説明と聞くことのできる部分で生じる引用発話は「って」でマークされ、新たに付け加えられたことがらは「とか」でマークされていると見ることができる。再説明と聞くことのできる部分のうち、7 行目は 5 行目から直前までの引用発話に対する、語り手自身の仮想的な反応である。これに対する 8 行目により、語られた内容について B が理解したことに加え、A がその出来事に対してとった態度も理解したことがわかる。

ただし、再説明と聞くことのできる部分も、断片より先行する部分の会話における語りを類

データ 2 [会話 ID: C002_016 2540.761 秒-2574.958 秒]

- 1 B そっか: 自分からゆったのかな: hhn
(0.6)
- 2 A いやもうできいやあれこう続けられないねってこう (Dン) 僕が何何ゆっても
3 そうゆうふうにゆわれるんだっ [たら もう続けられないねって
4 B [ふーん うん うん。
5 何話してもさ ずっと黙ってたよ とかゆって。 ((大きめの音調の高低))
(0.4)
6 何時間も黙ってたからって。
(0.3)
7 あんたもよく耐え [てたね h っ h て h。
8 B [ahhahahahahaha
9> A こ:の二人ね ちょ すごい粘り強い [なとか思ったんだけど
10 B [すご:い:。
11> なんか 何時間?
(0.6)
12> A 二時間ぐらいは二時間 もっとだったかな
13> なんか (0.4) ずっと黙ってるんだよとかゆって。
14 えっ
15 B k え::[::。
16> A [° えっ° (.) その場からあたしは絶対 逃げ出したくなるけどな:とか 思いながら。
(笑い顔, 肩をすくめて小刻みに左右に体を揺らす)
(.)
17> A すごいね 根性あるね とか思いながら。
18 B へ:.....。
19 A だからもう別れてきたってゆわれて
20 B そう:::。

似の表現で繰り返しているわけではない。同様に「とか」でマークされる発話についても、息子がAに報告したことと、それについてA自身が抱いた所感とがあり、内容そのものの性質や地位による違いは明確ではない。むしろ、引用発話の連続によって語りを構築する上で、語りのどのような部分を構成するパーツとして扱うかという、当該引用発話に対する語り手の態度が反映されているものと考えられる。このことを例証するため、図1aおよび図1bを見てみたい。5行目に比べて16行目は演技的な音調で発話され、上半身全体による動作を伴っている。このことにより16行目がより強調された発話方法をとっていることがわかり、それだけこの発話において提示されているものが新奇なものとして扱われていることを示すといえる。

5. 考察：不正確な引用であるということ

先行研究においては、「とか」は「なんか」「なんて」との交換可能性が指摘されており(大和2010, 住吉2015), なんらかの条件に合致する複数の候補のうちの一つを選択して提示するという機能が共通するとされる。ただし、「なんか」は引用マーカーとしての用法は持たない一方、「なんて」では引用マーカーとしての用法が可能である。しかしその場合でも、「とか」と比較して、「なんて」の引用部分を卓立的に扱うという機能は限定的であるように思われる。

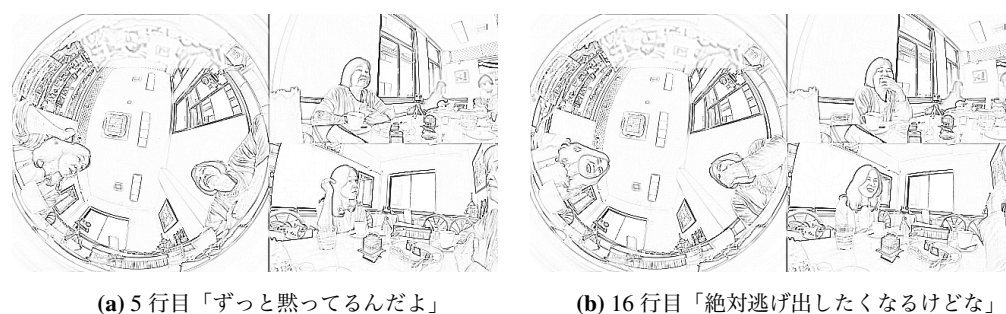


図1 データ2における参加者の姿勢

このことは、「とか」の卓立的提示の機能は、複数の候補の中から一つを選ぶという辞書的な機能からのみ生じるわけではないのではという推測をもたらす。

むしろ、「とか」による引用が、その引用部分が不正確であることを表面化することにより、語りの上での卓立的な位置を付与されるとは考えにくい。ほかの種類の引用マーカーと、不正確さにおいて差があるとは考えにくいためである。そのことはこれまでの断片においても例証されているといえるが、改めてデータ3を見てみたい。データ3は妹のAと姉のBがBの知り合いについて話している場面の会話断片である。断片の直前では、話題になっている知り合いが「ベジタリアンになった」と述べられ、掲出時点ではその影響やきっかけについて話されている。

「とか」による引用は9行目において生じているが、引用発話は9行目以外にも2行目、6行目、10行目においても現れている。このうち「とか」が用いられている9行目のみが不正確であり、それゆえ字義的な引用を後景化しているとは断じがたい。2行目、6行目、9行目、10行目の引用マーカーの違いは、それぞれの語りの上での位置づけを反映しており、引用発話自体の性質の違いは見出しにくいといえる (cf. 白田 2021)。

先行研究において指摘されていることを整理すると以下ようになる。「とか」が規範文法上は並列のマーカーであり、そこから、複数の候補を暗示しつつその中の一つを選んで提示するマーカーとして用いられる。さらにはその複数の候補をなんらかの卓立した事物の集合として扱い、そのひとつとして提示する機能を持つ。一方、これを引用の複合助詞として用いられる場合に絞って考えたとき、「複数の候補」の存在がほかの引用方法と比較して前景化されず、マークしている引用発話の卓立のみが文法的機能として残る、と言えそうである。

6. おわりに

本研究では日本語日常会話において、物語の語りの中で生じる引用発話を「とか」でマークする場合について、他の引用マーカーを使用する場合との対比に基づいて分析した。「って」は語りの進行において予想可能な帰結を述べるのに対し、「とか」は新奇な事柄を提示するのに用いられる。語りの語り手はこれらのマーカーを用いて、引用発話の連続によって物語を構成する上で、それぞれの要素をどのような位置づけで配置しているのかを示し、物語を構造化している。

データ 3 [会話 ID: K001_008 278.024 秒-319.943 秒]

- 1 B でそんなに痩せてて(.) げ-(0.5) あの(1.4) だいじょぶなのかと心配し(0.5) てしまって:
(1.5)
- 2 B でなんか(1.8) だいじょぶ?ってゆったら大丈夫(.) ってゆんだけど:
(0.4)
- 3 A 何がきつか(け) だったの
(1.5)
- 4 B なんか体調が:あんま [り:
5 A [うーん。
(0.6)
- 6 B やっぱりよくなって:(.) ってゆってて:
(0.4)
- 7 B でもともと太ってるんじゃないのに:
8 A うん。
(2.3)
- 9> B なんか痩せた:とか言ってるから
(0.9)
- 10 B いや いや いや 痩せないほうがいいんじゃないみたい(な)
11 A nh h h
(2.7)
- 12 B ちょっと心配だけど
(3.2)
- 13 B ね
14 B ね

また、引用部分を語りの中で卓立させるという機能は引用マーカーとして用いられない場合と共通するが、引用以外の場合には類似の候補が複数ある中でそのうちの一つを例示するという機能を前提とすることが先行研究において指摘されているのに対し、引用マーカーの場合には複数の候補の存在、あるいは引用が不正確であることの前景化が、必ずしも卓立の機能的前提になっているとは言えない。

本文中で用いた転記記号

本文中で会話の転記に用いた記号を表 1 に示す。これらの記号は西阪(2008)に拠る。

謝 辞

本研究は、国立国語研究所のプロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー・小磯花絵)による成果に基づいて行われた。また日本学術振興会科学研究費交付金若手研究「日常会話コーパスを用いた「課題」に基づく会話の分析:定量・定性の両面から」(研究代表者:白田泰如, 課題番号 20K13019)の助成を受けて行われた。

文 献

砂川有里子(1987).「複合助詞について(助詞指導の問題点<特集>)」 日本語教育, 62, pp. 42-55.

表1 転記記号一覧

[発話の重なる開始（重なる終了か]）によって示されることもある
:	直前の音が引き伸ばされている
=	発話末と次の発話頭に付され、その二つの部分が隙間なくつながっている
-	直前の語が途切れている
?	発話末が上がる音調
↗	発話末が上がって下がる音調
↓	直後の音調が下がっている
↑	直後の音調が上がっている
(○)	転記に表れない参加者の動作などについての転記者の注記
下線	強調されている
UC	アルファベットの <u>場合</u> 、大文字での表記によって強調が示される
(発話)	不明瞭な発話
(.)	おおむね0.2秒に満たないわずかな間
(数字)	おおむね括弧内の数字の秒数の間が空いている
> 発話 <	記号に挟まれた発話の部分が相対的に速く発話されている
< 発話 >	記号に挟まれた発話の部分が相対的に遅く発話されている
h	呼気音（聞き取りに応じて他の子音が用いられることもある）
.h	吸気音
¥発話¥	笑いの呼気は聞き取れないが、笑い声で発話されている
° 発話°	小さい声で発話されている

- 寺村秀夫 (1991). 『日本語のシンタクスと意味 III』 くろしお出版, 東京.
- 森山卓郎 (1995). 「並列述語構文考-「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって-」 『複文の研究』 くろしお出版, 東京 pp. 127-149.
- 天野みどり (2001). 「若者ことば: 銅メダルとかとった (特集2 「少年」の現在)」 東西南北, pp. 100-107.
- 中俣尚己 (2008). 「日本語のとりたて助詞と並列助詞の接点-「も」と「とか」の用法を中心に」 言語文化学研究, 3, pp. 153-176.
- 大和啓子 (2010). 「「とか」による例示について」 筑波応用言語学研究, 17, pp. 17-27.
- 劉曉傑 (2011). 「ぼかし表現「とか」についての考察」 相愛大学人文科学研究年報, 5, pp. 48-35.
- 洞澤伸・奥村佳奈 (2015). 「若者言葉「とか」の強調用法について」 岐阜大学地域科学部研究報告 pp. 1-17.
- 住吉紅実 (2015). 「「とか」の機能的分析」 英語学英米文学論集, 41, pp. 63-79.
- 山下悠貴乃 (2017). 「配慮表現としての「とか」について」 筑波大学地域研究, 38, pp. 127-138.
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2020). 『『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析』 国立国語研究所論集, 18, pp. 17-33.
- Harvey Sacks, Emanuel A. Schegloff, and Gail Jefferson (1974). "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation." *Language*, 50:4, pp. 696-735.

- Emanuel A. Schegloff (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Harold Garfinkel (1967). *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall Inc.
- 平本毅 (2018). 「会話分析の広がり」 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実 (編) 『会話分析の広がり』 ひつじ書房, 東京 pp. 1–33.
- Gail Jefferson (1978). “Sequential Aspects of Story Telling in Conversation.” Jim Schenkein (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. New York: Academic Press., Chap. 9 pp. 213–248.
- Jenny Mandelbaum (2012). “Storytelling in Conversation.” Jack Sidnell, and Tanya Stivers (Eds.), *The Handbook of Conversation Analysis*. West Sussex: Wiley-Blackwell., Chap. 24 pp. 492–507.
- 白田泰如 (2021). 「態度をほのめかす例示：日本語引用表現「みたいな」の分析」 国立国語研究所論集, 20, pp. 149–169.
- 西阪仰 (2008). 『分散する身体：エスノメソドロジエ的相互行為分析の展開』 勁草書房, 東京.

関連 URL

『日本語日常会話コーパス』 <https://www2.ninjal.ac.jp/conversation/cejc.html>